

人生を拓いてくれた「珠玉の言葉」1978年

1978.4

- ・ 人生に希望がなくては「万事休す」である
- ・ 人の価値は、その有する愛と知と質と量による
- ・ チョットボケているような人に、案外悟っている人が多く、いかにもシャチコ張って真面目に気張っている人には、往々、その心底見かけによらぬたわいのない連中が多い。

1978.5 現代人生論より

- ・ 胸の痛みを乗り越えなければ人は成長できないのか？
- ・ 日常生活への埋没、それが人生なのか？
- ・ 乗り越えたと思いつつ、まだ恋をしている自分
- ・ 歴史とは無数の人間の祈念と願望の累積
- ・ 書物でもいい。師匠でも友人でも恋人でもいい。だれに出会ったかということが重大だ。そして、邂逅によって結ばれた友情に、私は人生の人生たる証を見ようと思う。
- ・ 愛の信義は謝念
- ・ 謝念し追従であってはならない。自分の生命をのばすための苦しい戦いである
- ・ 和して同ぜずか同して和せずか？
- ・ 絶望しないような人間は、ある意味でたよりない人だ
- ・ 人生は無限に広く深い
- ・ しっかり心の準備をしておこう
- ・ 絶えず「最後」の場面における自己を想像してみることが大切だ
- ・ 人生何事かなせば悔恨あり、何事をもなさざれば、これもまた悔恨という言葉がある。しかし、そんなことを考えてばかりいたって、どうなるものでもない。一片の誠意をもって生きることだ。苦悩はどれほど多く、ときに墮落し、みじめな気持ちになっても、一片の誠意は失いたくないものである。
- ・ 人間の語る言葉のうちで最も美しいのは、相聞と辞世であろう
- ・ 愛することと死ぬということは、どちらも人生の窮極、いのちの燃えあがるころだ。

1978.4.30 われら何を掴むかより

- ・ 心がわるいより、体がわるいほうがいい
- ・ 友とするにわるき者……病なく、身強き人

- ・ あしの骨を折って 苦しそうな声で 犬が鳴いた ぼくは涙が出てきた 犬のそばに行って「生きててや」といった。(全盲児の詩)
- ・ せっきやく、人間として生まれて来た以上、社会の一員として自分はいったい何が出来るか、何の為に生きているのかと言う事を、障害者であるからこそ、よけい、慎重に考え、行動していかなければならないと思うのです。
- ・ 人が恋する時、人間として飛躍する